

整理番号 107 執筆者(フリガナ) 佐藤 真治(サトウ シンジ)

タイトル 『幸せの総量を上げるために』

紹介文 岡山県議会議員、総務委員長、子ども応援特別委員会委員

もう30年前になりますが、我が家の代々の家業を自主廃業した後に、母が選んだ仕事は「無認可保育園」といわれる、今でいう昼夜保育園(託児所)でした。「ベビーホテル」とも呼ばれ、当時は、しばしば新聞紙上を賑わすような社会問題となっていましたので、思春期のど真ん中にいた私としては、非常に思うところがありました。

一方で、事情は様々でしたが、深夜まで何十人もいた子ども達の姿に、人間社会の難しさや、社会の矛盾を自分なりに感じ取っていて、それをなんとか変えたいと思ったのが、今思えば、政治の原点だったのだと思います。

世の中は「幸せの総量」が決まっていて、誰かが幸せなら、誰かが不幸になる、そんなゼロサムゲームなんじゃないか? 社会の贖罪を最も弱い立場の子ども達が、一身に背負うことになるんじゃないか?・・・けれど、そうした悪循環を断ち切りたい、そう思うようになった、その思いは今も変わりません。あの頃確かに、いたいけに親を待ち続ける子ども達のあどけない姿があり、しばしば問題は起きましたが、生活を賭けて、どうあれ夜中まで働いている親達が、子ども達のために懸命にひたむきに生きている姿があり、そこには「愛」がある、そう信じていたからこそ、私は、そのように感じたのです。

しかし、「愛」が少し見えなくなりました。母が託児所を辞める原因が、体力的なこと以上に、耐えられない親の変化であったこと・・・様々な事情がある中で、生活のためではなく、享乐的な「子供がいる子供」が生まれてきたこと・・・それが、象徴的です。親子の「愛」の形が、実際は、なかなかそうはならないけれども、そうあるべきだと誰もが感じていた家庭の「愛」の姿が、一部では、もう根本的に変わってきているようです。いったい、どうなってしまったんだろう? 親が親たるゆえんも、家庭が家庭たるゆえんもない。いつのまにか、あるはずの「愛」がなくなっている場面に、しばしば出くわすのです。

加えて、背景にあるのか、環境が萌芽させるのか、障害の影に対して為す術もないままに立ち尽くしているような感さえあります。今まさにあの悪循環、負の連鎖は、もはや暴力や貧困の終わらないスパイラルに陥っているようにすら感じます。

しかし、だからこそ敢えて、おセンチであろうとも、「愛」しかない、と思うのです。いつも一人一人が、誰かを思い遣る優しさの積み重ねこそが「社会」である、そういう社会にしていくのは、強制力を伴ったり、政治の力ではありません。人は人によって傷つき苦しめられますが、人は人によってしか癒されず、救われないのだ、と思います。そして、幸せを奪い合うゼロサムゲームではなく、「愛」をもって、「幸せの総量」を皆で押し上

げていく以外、人間社会のあらゆる問題は解決しない、そう感じています。政治も、そうでなくてはなりません。

問答のようですが、例えば、児童虐待を止めるためには、結局は、一人一人が変わっていくしかないのだと思います。虐待の当事者だけの問題ではない、一人一人の問題なのだ、そのことを強く感じます。

10周年記念行事に： 参加させていただきます。